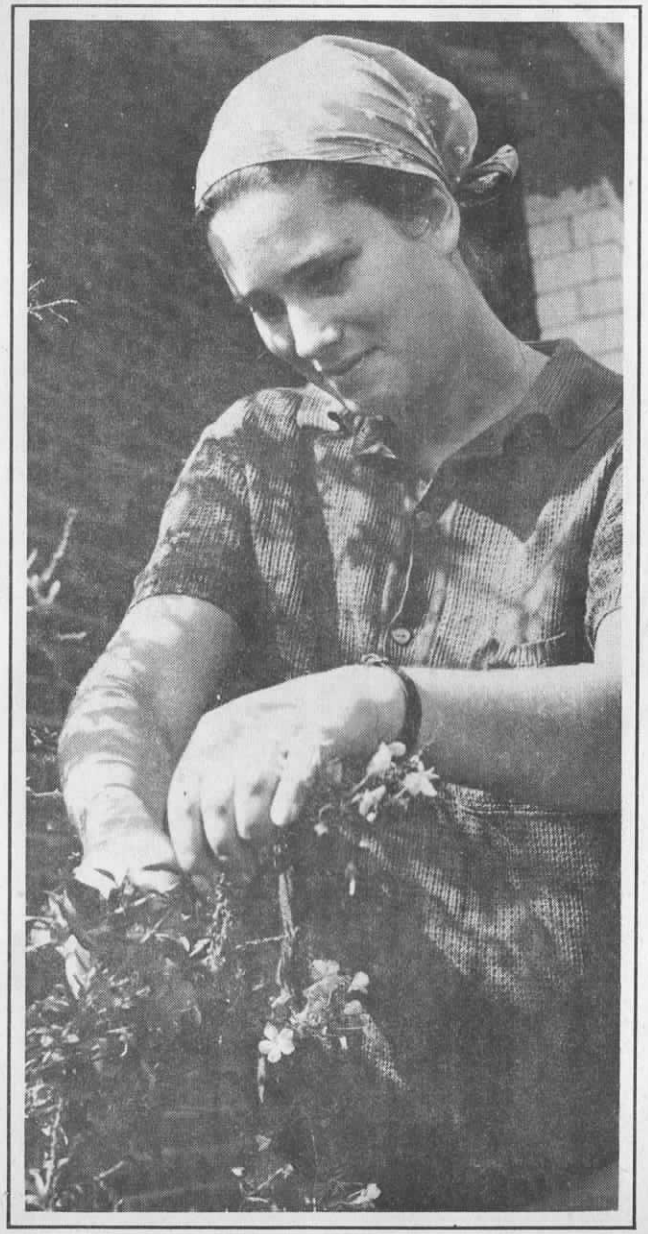
キブツの生活 (1)

——はじめて耳にする人のためのキブツの紹介——

シュロモー・タミール
百瀬 直彦(訳)



はじめに

人間の共同生活には長く多彩な歴史がある。古い昔からすぐれた人びとが共同して、世の貧困、堕落、不平等、搾取などと闘ってきた。ユダヤの教典や文学はそれらで満ちあふれている。

昔の例に導かれ、あるいはこの地の特殊な地理的、政治的状況によって、今から六十年前、一群の人びとがキブツのもといを打ち建てた。ヨルダン川のほとりのデガニアとガリラヤ湖畔のキネレットというキブツである。いったん置かれたこの基礎は、十年後に、ヨセフ・トルンペルドール労働隊の道路工夫、鉄道工夫への働きかけや、エン・ハロッド、テル・ヨセフ、メルハビア、ゲバ、ベイト・アルファ、ヘフツィバ、ラマト・ラヘル、などへの移住者によって固められ、引き継がれていった。

この小文の内容は四十七年間の一キブツでの労働、協力、平等に捧げられた半生より生まれたものである。

読者にぜひとも知っておいてもらいたいことは、我われキブツの住人は決して隠遁者でも、なまけものでもなく、おとぎ話の世界を生きるものでもない、ということである。我われは、まわりで起こっているさまざまなこと、世界の生活条件の向上、科学技術のめざましい進歩についてよく知っている。我われもこの恩恵に浴したいと思うし、他の人びとにも及ぼしたく思う。そして人間の間を裂くようなこと、人類の破滅を避けるため、直接間接に日夜つとめている。我われは決して原始の時代をなつかしがる懐古趣味のロマンチストではないのである。

我われは、協力、平等、共同生活——いくつかの集団に分かれ、その集団の共有する資産を用いて誰もが労働し、その労働の成果を楽しむような社会——こそが、貧困、堕落、戦争の惨事をなくし、人間に真の幸福をもたらすものだと信じている。

私がイスラエルに移民して来た当時は、数個のキブツしかなかった。当時そこの人びとは各二、三十名しか居らず、人びとはキブツの人口は、全員が家族のように暮らせるほどに少なくなくてはならないと思っていた。そこで我われ、ヨセフ・トルンペルドール労働隊は大規模なキブツを造るため、国民的キブツ運動の組織にとりかかった、我われの望んだことは、今居る、あるいはいずれやって来る誰でもが気易く入ることのできるキブツを造ることだった。そしてまた、周囲にあるどちらかといえば禁欲的な生活よりも、そして我われのあとにした国よりも、より良い生活条件を造ることだった。アメリカやヨーロッパの都市にある文化の高さを保ちつつ、しかも都市の生活につきものの孤独、不快に悩まされぬ生活を築くことがねらいだった。

今日では全国に二三〇以上、メンバーの数にして八万人以上がキブツに生活している。キブツ同士はたがいに文化、教育、経済などあらゆる分野にわたって密接な連絡を保ち、イスラエルの国家の中枢となっている。ほとんどのキブツでは第三世代の子供が居り、父母、祖父母とキブツに暮らしている。一家の総勢数十人がキブツメンバーとなっているような家族すらある。

キブツ、テル・ヨセフは七百人のメンバーを持ち、経済的にも豊かなもののひとつである。二三〇余のキブツの中には一千人以上のメンバーを持つヤグール、ギヴァト・ブレネル、アフィキームなどもあれば、百人以下のメンバーしか持たない小キブツも七十程ある。

キブツ運動としては、最低どのキブツも百家族以上の構成にしたい考えである。

新らしくキブツが造られる時には、耕作地を造成すること、水利、灌漑の準備、道路敷設、家屋建設、電気、電話設置など、大変な努力が払われねばならない。同時に生産資材も必要である。この莫大な費用の大部分はユダヤ基金、国民基金から支払われ、イスラエル政府予算からも、キブツ発展のために援助費が支出される。数年たつと、新らしいキブツは経済的に自活できるようになり、その後何十年かたって、はじめてもとがとれるだけになる。過去の幾多の経験から学んで、現在では新らしいキブツも、創立四―五年で、古いキブツが三―四十年かかって得た生活程度の高さにまで達するようになった。

一九六八年・シュロモー・タミール

■キブツの労働

キブツでは成人のメンバーは男女を問わずみな働く。働く場所は各人の体力、能力、才能に適したところを探すように努める。新らしく入った人も、色々な場所で働いてみて、自分が最も興味を感じ、生産的で能率的に働け、それ故に満足の得られる職場に落ち着くこととなる。誰もが気持よく、自発的に労働し、自分の労働の成果に興味を持つようになることが我われのねらいである。各人が労働を創造行為とみなすことが望ましい。ちょうど画家や詩人や、彫刻家が創造する時のようにである。真の芸術家は金のためにだけ創造するものではなく、その創造自体が彼をかりたてるからである。

八時間労働

キブツでも他所と同じく一日八時間労働は定められている。しかしながら、収穫時や忙しい時は、勿論これを越えて労働するし、雨期や、オフシーズンには多少短くなる。この余分に働いた時間は労働係によって記録され、いずれひまな時に彼の労働時間が短縮されるしくみになっている。八時間労働の原則に変わりはないが職種によっては夜間労働を含むものもある。例えば夜警、子供の家の不寝番、台所、食堂の夜の当番、牛や羊小屋などである。ところによっては、平等を期すため夜の仕事を全メンバーの持ち回りにしたり、夜の一時間を昼の一・五時間として計算するところもある。夏の盛りの暑い時には朝早くから昼まで働き、三時頃まで昼寝し、それから二時間程働く時もある。メンバーが年をとると労働時間は減らされるが、身体に別状ない限り六〇、七〇まで八時間労働で通すメンバーが多い。

仕事のいろいろ

仕事場はいろいろある。動物をあつかう仕事――乳牛、肉牛、羊、七面鳥、にわとり、養魚など。畑や果樹園の仕事――麦、米、綿畑、牧草地、オレンジ畑、オリーブ畑、バナナ畑、ブドウ園、など。これら農業の他に、キブツにとって欠かすことのできない共同食堂、台所、洗濯場、裁縫場、子供の家、学校、靴造り、などのサービス部門がある。また多くのキブツにはトラクターの修理工場、溶接場、木工場、などの小工場がある。最近では主として身体の弱い人や老人のために、屋内で坐って仕事できるプラスチック工場なども持っているキブツが多い。工業の導入によって上がる利益もさることながら、これに触発されて、キブツの若い者の中から優秀な工業技術者が出て、外の学校で学んだ技術を実際に自分のキブツに還元できるようになった。

問題とその解決

メンバーのひとりひとりがどうやったら可能な限りの力を仕事に注ぎこむことができるか？　また全体としてどうやって調整してゆくか？　ひとりひとりが自分の労働に誇りを持ち、打ちこんでいる限り、時間も物も決して無駄には使われない。みんなが自分のこととして気を配るからである。誰でもが満足に感じる状態を数百人の規模で作り上げるのは至難のわざである。キブツとしての経済的問題もあり、個人的な趣味、休暇、体力の問題もかかわってくる。完全な解決法はない。

最善の方法として我われのとっているのは、各人に最適と思われる職場にできるだけ長く居ることである。たとえばそれは果樹園であるかもしれないし、靴工場かもしれない。とにかくその仕事場の専門家になることである。必要な知識と経験を持てばなんとか発展させたくなったり、改善したくなる。そうなればもう心配ないのである。各仕事場では管理者は必要ではない。各人が各人の仕事についての管理者であり、労働者である。職場ごとに集まって一日の、一週の、一ヶ月の、また一年の計画を立てて、総会における全体との調整の上で実行に移す。

すべてのメンバーが自分の所属するキブツを〈私のキブツ〉と呼べるためには、キブツ内で行なわれるどんな小さなことも彼の耳に

入っていなくてはならない。数ある委員会が何を討議しているか、各仕事場での仕事の進み具合はどうか、個人に何が起こったか知らせるために、食堂の入口の掲示板には、毎日眼を通すのに忙がしいほどのニュースが貼られ、そのうえ毎週、あるいは月に二度ほど、印刷物が配布され、あらゆることが知らされる仕組になっている。そのキブツ内のことばかりでなく、キブツの所属する連合内のことも知るために、キブツ連合が月に一回とか年に数回、立派な雑誌を出版することもある。

労働の代償

キブツには雇用者、被雇用者、管理者、被管理者といった関係がないのと同様、労働を金や物に換算することは一切ない。それなら一体何のために働くのか、と問われる。第一に、仲間と共に労働すること自体我われにとっては喜びである。第二に労働の成果として我われのキブツが発展し、子供達が成長し、食物、衣類が豊富になってゆくのを目にするのは喜びである。第三に、労働が商品化されないことはすなわち、たとえ私が不具者になり働けなくなろうとも、安心してキブツに生きてゆけることを意味する。強いられぬ自発的な労働ほどに人間を明かるく、健康にするものはない。

■キブツの家族

家庭を持つ

ひと組のカップルが結婚して家庭を持つことを決めると、そのことを両親やキブツの担当係に申し出る。さっそく二人のために新らしい住居が準備され、必要なものがすべて与えられる。結婚式の日程が定められ、その日には資格のあるユダヤ教のラビが呼ばれて式が行なわれる。イスラエルでは結婚はすべて宗教的なものであり、宗教局の仕事であるからである。そのあとで大きな祝祭がキブツ全体でとりおこなわれる。キブツの外からも親類が招かれ、時によっては遠い外国の親類もかけつける。歌や踊りの才能のある者が中心になって喜びの日は夜更までつづく。同じキブツの二人が結婚するよりも、他のキブツのメンバーと、またはキブツ運動で知り合ったひとと結婚する例が多く、妻あるいは夫を自分のキブツに連れてきて住む場合もあれば自分がキブツを出て、妻あるいは夫の住む所に一諸になる場合もある。

自分で結婚すべき相手をみつけることが原則となっているので、時としては適令期になってもなかなか相手のみつからない者も出てくる。こんな時にはキブツでは、その人を他のキブツの援助のために出してやったり、若者の多く集まるキブツ運動の仕事にたずさわらせたり、できるだけ出合いのチャンスの多いように計らってやることもある。

その若い家庭に子供の生まれることは、両親、その父母にとって、と同じく、キブツのメンバー全員にとって大きな喜びである。別に労働力になるから、後継ぎができたからというのではなく、まさに生まれることが、そのまま祝福なのである。ヨセフ・バラッツの著者『ヨルダン川のほとりの村』（邦訳、松本要、民族問題研究所出版）のことは、そのまま我われにもあてはまるのである。子供の誕生の祝いの他に、十三才になると成人式（バル・ミツヴァ——ユダヤ教の律法を守れる年令）がある。キブツでは毎年該当する子供

達のためにはなやかなお祭りが予定されているが、本来バル・ミツヴァは家族生活の中のことなので、外部から多勢の親類が来て家庭内でも祝う家も多い。

夫婦部屋

一日の労働を終えて帰り休息する部屋。子供を迎え、夕食前のひとときを共にすごす部屋。寝る前の読書、編み物、夫婦の話をする部屋。安眠を約束された部屋。夫婦部屋は通常二部屋、寝室と居間、それにシャワー、トイレ、簡易台所、ポーチからなっている。ベッド、安楽椅子、書きもの机、カーテンなどはキブツの中で最も立派なものであり、ラジオ、電気ポット、小さな戸棚、冷蔵庫、小さなながし、本棚、など、休息といこいの場所に欠かせないものは一応そろっている。

こうして、午後四時半か五時に子供達が子供の家や学校から帰ってくると、コーヒー、お茶、ココアなど、好みのものをいれてやりにぎやかな話に花が咲く。

しかし、この夫婦部屋は夫婦の睡眠と休息のためにあるのであって、子供は夕食を食べに、また寝にそれぞれの場所に帰るし、また夫婦も食事のために共同食堂に行く。洗濯物は共同洗濯場で洗われ、自分用の棚に戻ってくる。つくろいものもその過程で済まされている。テレビを見たいひとのためには、テレビ室が、本を読みたいひとのためには図書館が、またお茶やコーヒーの設備のある談話室もそなわっている。週に二、三晩は、映画とか歌とか講演がある。運動したい者のためには運動場やプールがある。夫婦部屋の前には芝生や実のなる木があり、その管理、手入れはそれぞれの家庭にまか

（キブツの総会のスケッチ）

されている。新らしい夫婦用の部屋が建てられると、古いメンバーから優先的に立派な方に移り、そのあとには若い者が入ることになる。

台所と食堂

食堂とそれに付随する台所はキブツ生活の中心であり、地理的にもキブツの中央に位置を占め、周りをメンバーの家が囲んでいる。台所にはあらゆる近代的な調理用具、冷蔵庫が備えられ、一流の栄養士が調理計画を立てている。台所を職場とする人（多くは中年の女性）が常に清潔を保つようにこころがけている。食堂は四方をガラス窓で囲まれた明かるい、のびやかな雰囲気の建物で、テーブルと椅子がきちんと並べられている。メンバーが仕事から朝食、あるいは昼食に、そして部屋から夕食に来ると、食堂で働く人の手によって皿、ナイフ、フォーク、などがそろえられている。そして席につくとアガラーと呼ばれる手押し車にスープ、おかず、などをのせて給仕してくれる。その日のメニューは決まっているが、あいにくその料理の嫌いなひとや、健康のために特別な料理の必要なひとのために、台所では常に二、三種類の違った料理を用意している。食べ終わると自分の使ったものを洗い場に持ってゆき、区分けして投げ入れる。洗い場には二、三人が働いていてすぐに洗浄して次の用に供する。この皿洗いの役は義務制で、すべてのメンバーにいつかは当たるようになっている。

金曜日の夕食（シャバト・イヴ）にはブドー酒かビールが出て、特別な肉の料理が作られる。この晩だけはキブツメンバーも白のワイシャツ、はなやかなよそおいをして夕食につらなる習慣になって

いる。

■キブツの女性

キブツ女性はキブツにおいて経済的に、社会的に、また子供の教育の上で自由で同等の資格をもつものである。しかし、キブツにおいて利益を上げている生産分野——果樹園、畜産、その他——での労働は、非能率的である、体力的に無理だ、という理由から女性の職場は食堂、台所、子供の家、学校、などのサービス部門に限られる傾向がある。勿論若い女性で果樹園や畜産部門で働く女性もいるが、結婚して、子供を持ってからもなお太陽に焼きつけられての戸外の労働に耐えられる女性は多くない。

そこで我われは女性が食堂や台所、子供の家や洗濯場で働き、その仕事を十分に遂行し、しかも満足するにはどうすべきか考えねばならない。これらの仕事に興味と改良への熱意を持つために、彼女らは栄養学、家事学、養育、その他の技術に関する講議に派遣されることが多い。特に興味を持ち、研究をはじめるものもいる。また趣味をもって、キブツのみんなに認められるような手腕を獲得する者もいる。しかし第一に問題になるのは、特に女性の場合、キブツ的生活全体に満足しているかどうかである。愛する者のためにするサービス部門の労働は単調でも熱意がこもるが、愛せないもののためにするこの種の労働は耐えがたいものとなる。生産部門の労働は労働それ自体の成果が数字となって、キブツの発展となってあらわれてくるので、打ち込みやすいと言える。また労働の誇りも大きい。それに比べてサービス部門、女性の役割は目立たずしかも不断の注意力を要求される。

（52頁へつづく）

いを意味しており、そのこと自体が危機を味している。この宇宙は大平無事に存在し

いのであろうか。そのためには前にのべた良心をたぐってゆく以外にない。（つづく）

（31頁よりつづく）　女性の平等が近代諸国で、またイスラエルで叫ばれて久しいが、ここキブツにおいても、もっとも女性にとって解放された場所であったはずのキブツにおいてさえ、女性の書記、労働委員など、中心になって未来を設計する部署には女性の進出は数少ない。今後に残された問題である。

（つづく）